

私こそがテコンドー・オタクです

朝比奈 浩一（高知香南・安芸・西テコンドークラブ 41歳）



私のテコンドーとの出会いは、1988年のソウル・オリンピックに遡ります。ソウル・オリンピックの開会セレモニーで、白い道着を着た何百人もの修練生たちが、回転回し蹴りや後ろ回し蹴り、様々な跳び蹴りで板割りをを行っている光景をブラウン管越しに見、「これはすごい！！」と一人興奮したものでした。当時は12歳、中学一年生の頃でした。

実はそれ以前、小学生の頃に習っていた少林寺拳法の道院で、「韓国にはなにやら蹴り技だけで戦う『テッコンドー』という奇妙な武道がある」ということは耳にしていました。当時から蹴り技が好きだった私はその話を聞いた時、『テッコンドー』という異国の武道にすこぶる好奇心を刺激され、また漠然とした淡い憧れを抱いたものでした。

ちなみに現在『テコンドー』という呼称とカタカナ表記が一般に浸透していますが、これは1992年に発売されたSNKの対戦型格闘ゲーム『餓狼伝説2 -新たなる闘い-』で登場した、韓国のテコンドー使い『キム・カッファン』の人気の功績が大きいということに異論の余地はないと思われます。この餓狼伝説2が登場するまでは『テッコンドー』もしくは『テコンド』（ハングルには基本、長音表記がないそう）の呼び方が一般的だったような気がします。私が初めて出場したWTFの大会も『テコンド』表記だったため「あれ？『テコンド“一”』じゃねーの??」と思ったものでした。

余談はさておき、上記のテコンドーとの衝撃的出会いから私が実際にテコンドーを習い始めるまでには、その後かなりの年数を必要としました。具体的な年数は忘れてしまいましたが、たしか22・3歳の頃だったと思います。高知市内のある小学校の体育館でWTFテコンドーの練習が行われていると知り、入門しました。実はそのすこし前は、フルコンタクト空手の道場に通いながらITFテコンドーの通信教育を習っていたのですが、フルコンタクト空手の道場でテコンドーの技を独学で練習することに（当然ながら）物理的・精神的・組織的に限界を感じ、悶々とした思いを募らせていました。ちなみにその時期の教科書は1994年にテレビ東京系で深夜放送さ

れた、ITFのモランボンカップのビデオテープでした。

ともかく、IとWは違ってしまいましたが、ついに憧れのテコンドーを学べるようになるようになり、当時の私は本当に嬉しく感じていたように思います。

WTFにはその後3年ほど所属し、その間全日本大会にも出場させていただきました。しかしそんなこんなが色々あって諸事情につき辞めました。

その後、私がWTFに居た3年の間に高知にもITFとJTAのテコンドー道場ができており、以前通信教育を習っていた経緯もあったので、ITFの道場に“再”入門しました。

ITFにもその後3年ほど所属させてもらいましたが、指導内容が型や基本動作の極端な反復練習や、護身術のような“何か”ばかりで、私が考えていたITFテコンドーらしいものではなく、正直「つまらないなあ・・・」と感じました。また指導者の方も自分のことをマンセー（万歳）してくれるシンパが欲しいだけのようで、その考え方にも次第に着いて行くことができなくなり、挙句、当時交際していた女性（現在の妻）との仲を引き裂こうと、深夜12時に家に押し掛けられ、「お前たちが別れるまでオレは帰らない！」と、明け方5時まで居座り続けられる“事件”があり、その非常識さとイカレっぷりにほとんど愛想が尽き辞めました。

「ITFは技術は素晴らしいけど、何やら民族色・政治色が強い武道だなあ」と感じたものでした。

その後、古谷知也クラブ長が指導されていたJTAテコンドーの高知クラブへ見学に行き、“再々”入門。現在に至ります。第一回の高知県大会が実施されるほんの少し前、師走の初旬でした。

実はJTAに見学に行った当時は、もうあまりテコンドーの世界へ深入りするつもりはなく、今までの経験を活かして外部からアドバイスをするだけに留めるつもりでしたが（自らは伝統空手の道場に通ったりしていました）、古谷クラブ長から強く入門を勧めていただき、またJTAは思想的に偏った所も感じなかったので、入門の決意が固まりました。

当時の私は31歳。すっかり藁が立っていましたが「入門した以上は試合にも出て実力も示さねば立場もあるまい」と、最後のやる気を奮い立たせて選手としても頑張らせていただきました。後樂園ホールのリングにも立つことができ、実に満足のいく選手生活でした。

現在、私はJTAのクラブ長として高知香南・安芸・西クラブで週3回、テコンドーの指導を行っています。生徒やご父兄にも恵まれ、テコンドー指導者として充実した日々を送らせていただいております、感謝の言葉もありません。

紆余曲折、艱難辛苦がありにあり、自分が思い描いたテコンドー人生とはずいぶん違った形になってしまいましたが、「まあ、それも人生」「自らの業の招いた結果よ」と人生について語れるまでになったことで、意義のある生き方であったと思っています。

これからも私が指導するテコンドーを必要としてくれる人がいる限り、精一杯テコンドー指導者としての天命を全うしたいと考えています。

末筆になりますが、今回このような形で自らのテコンドー人生を振り返り、また発表する機会を与えてくださった河明生会長に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

最後までご清覧いただきありがとうございました。乱筆乱文、失礼致しました。私の歩んできたテコン道が、皆様のテコン道に何かしらの教訓を示すことができれば幸いです。

皆様のテコンドー・ライフがより充実したものになることを、心からお祈り致しております。